

## 解説 1

# 『中学校英語に関する基本調査』 から示唆されるもの

～小中連携を中心に～

上智大学教授 吉田 研作

今回の調査では、中学校において教師と生徒が英語についてどのように考えているかということを多角的見地から見ることができた。小中連携の問題や他教科に対する生徒の姿勢と英語に対する姿勢の違い、そして、何よりも、中学生と教師それぞれが自らの英語学習、英語指導についてどのように考え、実施しているかについて様々な示唆を得ることができた。本章では、その中から、特に小中連携の問題を中心に検討してみる。

### 1. 中学校入学前の英語学習

英語教育における小中連携は、『第1回小学校英語に関する基本調査』（2006）の教員調査でも分かる通り、小学校英語にまつわる様々な問題の中でも、最も大きな問題として指摘されている。そして、そのことは本調査の「教員調査」にもはっきり表れている。しかし、そのことを直接議論する前に、まずは、中学生自身が小学校で学んだ英語についてどのように思っているかについて「生徒調査」の結果から見てみよう。

まず、中学生の英語に対する気持ちと小学校で英語を学んだかどうかの関係について見ていこう。中学生にとって、英語はもっとも好きではない科目の一つになっている。また、英語の授業を70%以上理解できている生徒は、わずか40%程度にすぎないことが分かった。しかし、小学校から英語を何らかの形で学んできて、好

きだった生徒は、中学に入っても好きと答えるケースが比較的多いこと、そして、好きな生徒が英語を得意としている傾向があることも分かった。

もちろん、今回の調査では因果関係についての分析は行われていないので、はっきりと断言はできないが、上記の結果は、中学校入学前の英語学習が、中学校以降の英語学習に影響を与える可能性があることを示唆していると言ってもいいだろう。もしそうだとしたら、小学校でどのような英語学習が行われたかによって、中学校以降の英語学習が変わってくるのが考えられ、それだけ、小学校における英語学習の内容の重要性が問われることになる。

では、小学校時代の英語学習について見てみよう。今回の調査では、中学校に入る前に英語が好きだったかどうか、また、中学校で英語を学ぶことが楽しみだったか、という質問に対し

ては、好きだったという生徒、楽しみだったという生徒は共に50%に達しなかった。この結果だけを見ると、小学校で英語を学ぶことは必ずしもプラスの効果を生まないことが示唆される。これはどうしてだろうか。小学校英語活動自体を否定するものなのだろうか。

直接の原因かどうかは本調査だけでは分からないが、小学校時代の英語の学習の内容が何らかの形で影響している可能性が高い。特に、今までの小学校での英語教育は、各校が独自の取り組みを行っており、特に公式に決まった指針が示されていたわけではない。中には、文字を全く読ませないというところから、中学校の英語教育を前倒しているところまで千差万別である。では、本調査の対象となった生徒が、中学校入学前にどのような内容を学んでいたのかについて見てみよう。

本調査でまず分かったことは、中学校入学前に学校外で英語の学習をしていた生徒は約4割に上っていること。その内訳をみると、学習塾が最も多く、続いて英会話教室となっている。また、前述したように中学校入学前に英語が好きだった生徒は半数に満たなかったが、学習塾や英会話教室で勉強した経験のある生徒は、概して、中学校入学前に英語が好きだった（それでも62.2%）ことが分かる。一般に、小学校英語活動を「好き」と答える生徒は多い、と言われてきた。現に、先に紹介した『第1回小学校英語に関する基本調査（教員調査）』（2006）から、小学校英語で一番問題がないのは子どもの積極性（70.1%）だったことを考えると、62.2%でもまだ低いと言えるだろう。では、なぜこのような数字になるのだろうか。

今回の調査で、中学校入学前に学校外で英語学習をしていた生徒のうち、学習塾に通っていた子どもは46.3%、英会話教室に行っていた子どもは42.0%となっているが、中学生になると、学校外で英語学習をしている生徒のうち、学習塾が81.0%に対して、英会話学校はわずか8.7%に下がっている。このように、中学生になると学習塾に通う生徒が急激に増え、逆に、英会話教室に通う生徒が急激に減っていることから、

生徒、また保護者が小学校英語活動と中学校英語を明確に区別していることが推測できる。それと同時に、小学校で英語活動を体験してきた生徒にとってそのあまりの違いが大きな戸惑いの原因になっていることが考えられるのではないだろうか。

## 2. 英語学習の内容

ところで、中学校入学前の小学校や学校外での英語学習の内容に目を転じてみると、それが決して一様ではないことが分かる。小学校時代の英語活動は、オーラル・コミュニケーション活動が中心だと思っている人が多いだろうが、実は、20%の生徒は、英語を聞いたり話したりしたことがないと答えている。英語の「発音の練習」や「歌やダンス」などの経験はそれぞれ52.4%、51.5%あるが、その一方で、「アルファベットの読み書き」をやった子どもは63.8%、「英単語の読み書き」46.7%、「英文を読んだり書いたりする活動」37.3%、そして、「文法の学習」をしていた子どもが17.1%もいることが分かった。もちろん、各小学校が独自の目標を作ってその達成に向けた英語教育を展開してきたことも一つの原因として考えられるだろう。特に、今回の調査（「教員調査」）では、公立中学と私立中学の違いについても見ているが、私立中学の教員は、「小学校でアルファベットが書けるようになる」ことを6割以上が肯定しているのに対して、公立中学の教員は、逆に、6割以上が肯定していないことが分かった。私立小学校では、すでに昔から英語を教科として教えてきていることが影響しているのかもしれない。しかし、いずれにせよ、文部科学省の新学習指導要領の外国語（英語）活動の目的とは異なる英語教育も行われていることが分かる。

もう一つの原因は、学習塾と英会話学校の違いに見られるのではないだろうか。中学入学前から英語があまり好きでない、また、中学での英語の勉強があまり楽しみでない生徒が4～5割いるということは、このような小学校時代の学校外での英語教育のあり方が影響しているの

かもしれない。私立小学校の場合は、比較的ネイティブの先生あるいは英語専科の教員が、英語を使いながら教科として必要な読み書きや文法を教えているところが多いのだろうが、学習塾の目的はやはり受験の場合が多く、知識として英語を教えることが多いだろう。となると、小学生でも英語を話したり聞いたりする活動をまったくしたことがない子どもがでてきても決しておかしくないのである。

今回、文部科学省が学習指導要領に、外国語活動の目的を明確に規定したことで、今後、もう少し小学校の英語学習の内容が統一されていくことが期待される。しかし、今後、英語が小学校でも「教科」になった場合は、中学入試（私立）の科目として導入される可能性が高くなるので、結果としてますます、音声コミュニケーションよりも知識としての英語教育が小学生の間にも広がる可能性があることは、今後の大きな課題として忘れてはならないだろう。

### 3. 小中連携の現状

さて、すでに触れたように、中学校入学前は英会話教室に通っていた生徒が多いが、中学生になると、その数は激減し、学習塾に通う生徒が増えていることから、小学校と中学校で英語教育の質が大きく変化していることを、生徒や保護者が感じていることが推測できるだろう。しかし、新学習指導要領では、中学1年生の英語は、小学校の英語活動を前提として行われることを明記している。つまり、小学校英語と中学校英語がひと続きのものとしてとらえられなければならないのである。ということは、当然、中学校の教員としては、小学校で何が行われているかを知っていなければならないことになる。そこで、今回、中学校の教員がどの程度小学校英語活動についての知識を持っているかを聞いたところ、小学校英語について知っている中学校の教員は半数に満たない（48.5%）ことが分かった。しかも、「小学校の英語活動担当の先生と中学校の英語の先生とで集まる機会がある」28.6%、「小学校の英語教育（活動）の授

業見学に行く」25.5%、「小学校で授業をすることがある」14.8%、さらに、「中学校での英語の授業の導入ややり方を小学校に合わせて変えている」教員はわずか13.5%だった。

果たしてこれで小中連携は可能なのか、甚だ疑問が残る。また、小学校の英語活動についてどのように考えるか、という点では、小学校英語について「知っている」と答えた教員と「知らない」と答えた教員の間にかなりの差があることも分かった。このことを考えると、多くの中学校教員は、小学校で英語の何が、どのように教えられているかを知らないまま、子どもたちを中学生として受け入れていることになる。そして、その結果、小学校との連携どころか、小学校英語活動とは全く質的に異なった英語教育が行われ、小学校では楽しく英語を学び、英語が好きだった生徒を、嫌いにしてしまう可能性があるのである。

### 4. 生徒にとっての英語

今回の調査で、中学校入学前に英語が好きで中学校でも好きな生徒が18.2%（541人）いたものの、中学校入学前に英語が好きだったが中学校で英語が嫌いになった生徒は26.7%（793人）いることが分かった（逆に、中学校入学前に嫌いだった生徒で中学校では好きになった生徒は5.2%（153人）、そして、中学校入学前に英語が嫌いで中学校でも嫌いだと答えた生徒は37.7%（1,120人）いた）。つまり、もともと、小学校で英語が好きだった生徒1,334人中ほぼ6割が中学校で「嫌い」になっていることが分かるだろう。事実、中学生になると英語は、国語と並んで好きではない科目になっており、さらに、英語は、授業が分からない科目のナンバーワンという不名誉な地位を得ている。英語について「もっともやる気が高かった」のが「中1の始め頃」なのに対して、もっとも苦手と感じるのは夏休みが明けて1年生の後半に入った時だという本調査の結果から考えると、やはり小学校と中学校の英語の教え方の違いが、英語を1年も経たないうちに嫌いにする何らかの要因に

なっている可能性があることが示唆される。このような結果を考えると、小中連携がいかに重要な課題かが分かる。小中連携がうまく行われていないと、子どもたちがその犠牲になってしまう、と言っても過言ではないのではないだろうか。

## 5. 英語のつまずき

上記の点についてももう少し細かく検討してみよう。英語が苦手になる要因として、つまずきのポイントを見てみると、やはり文法が難しいことをあげている生徒が最も多く（78.6%）、続いて、テストで思うような点数が取れない、英文が書けない、英語が聞き取れない、単語が覚えられない、という項目が6割以上で並ぶ。逆に、外国や異文化への興味を持ってない、音読ができない、英語そのものが嫌い、という項目は5割を切っている。さらに、英語が「得意」「苦手」「好き」「嫌い」という英語の認識別のカテゴリーに分けてみると、当然ながら、英語が「好き」で「得意」な生徒はつまずきが最も少ないことが分かる。それに対して、英語が「得意」だが「嫌い」な生徒と、英語が「苦手」だが「好き」な生徒を比べてみると、後者の方が、外国や異文化について興味を持っており、英語を自ら進んで勉強する習慣が多少高いことが分かった。このことを先に見たデータと合わせると、ひょっとすると、小学校では英語が好きだったが中学校で嫌いになった（得意・苦手とは必ずしも同じではないが）生徒がこの中かなり含まれているのではないかと推測できるだろう。つまり、小学校時代には英語に対する好意的な態度は育成されるが、中学の英語教育についていけないために、嫌い（あるいは苦手）になってしまう子どもがかなりいる、と言えるのではないだろうか。

## 6. 英語が苦手でも好きな生徒

さて、ここで、最も大切なことは、たとえば英語が苦手でも好きだと答えている生徒がいることである。つまり、彼らは教師の指導次

第で伸びる可能性を持っているのではないか、ということである。英語が得意な生徒は、たとえ英語が嫌いでも、自らテスト等で高い点数を取るすべを知っている可能性があるが、好きなのに苦手な生徒は、教師の指導を必要としている、と考えられるのである。例えば、英語が得意だが嫌いな生徒は、テスト勉強は好むが、グループワークやコミュニケーション活動は好きでないことがよくある。以前、そのような生徒が、協調学習を嫌い、他の人と一緒にコミュニケーション・タスクをすることが受験準備の邪魔になり、無駄だ、と言っていたことを思い出す。このような生徒は、テストでは高い点数を取ることができるが、英語自体が好きではない。授業中も内職をして、学習塾の宿題など自分の勉強をしていることがよくある。そのため、グループで作業したりすることで、自分の時間がとられることを極端に嫌うのである。しかし、英語が好きな生徒は、グループ活動などのコミュニケーション・タスクを好む傾向があり、その過程で教師の指導を必要としている場合がよくあるのである。

## 7. 中学校教員の意識改革が必要

小学校での外国語（英語）活動が中学校の英語教育に及ぼす影響については、中学校教員の意識改革が必要なことが分かるだろう。英語教育の意味は何なのか、目的は何なのか、という根本的な問題についてしっかり考える必要がある。しかし、今回の調査の自由記述に見られるように、教員自身がまだまだ明確な目的や目標を持っているとは言えない。理想と現実の間で悩んでいる姿が見られる。その意味では、新学習指導要領は、そのような教員に日本の英語教育が目指す目標を提示してくれているように思う（特に高校まで見ると）ので、まずは、新学習指導要領をしっかりと読むことが必要だろう。

すでに見たように、小学校と中学校とでは、学習塾と英会話教室に生徒が通う比率が明らかに変わってくる。また、中学生は、英語に対す

る苦手意識が強く、他の教科と比べても、「嫌い」「苦手」という生徒が多い教科になっている。その考えられる理由の一つとして、小中連携が十分に出来ていないため、生徒は小学校の延長、あるいは、小学校での英語活動と何らかのつながりがあるものとして中学の英語に取り組むが、1年が終わる前に、すでに多くの生徒が苦手になってしまっている、という姿が浮き彫りになっている。その大きな原因は、中学校の教員が小学校英語活動についてあまりにも知らなさすぎることで、そして、小学校教員との連携がほとんどないことにあるのではないと思われる。

データから分かるように、英語が好きな生徒でも、苦手な生徒がかなりおり、その生徒が最も苦手としているのが文法であり、単語であり、英文を書くことである。もちろん、小学校で多少はやってきたはずの聞き取りや英語を話すことにも苦手意識が見られるが、これが、小学校

時代に英語を聞きとったり話したりすることをしなかった生徒が20%もいることを考えると、必ずしも不思議なことではないのかもしれない。

## ❖ まとめ

日本の英語教育は今、大きな転換期に差し掛かっている。小学校で英語活動が初めて導入され、それに伴って中学・高校の英語教育にも変化が求められている。本稿では、その中でも、特に小中連携の問題を多角的に考えてみた。2011年度から正式に小学校で外国語（英語）活動が必修化されるが、そのためには、まだまだ様々な準備が必要である。そして、その中でも最も大切なものが小中連携である。本調査でも明らかになったように、小中連携がうまくいかなければ、その犠牲になるのは、子どもたちだという認識を我々みんなが持つところから始めなければならないのである。